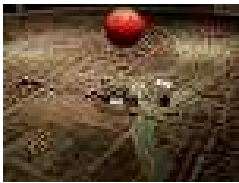


6月9日の午後に広島観音町教会を拝見した後、盛谷牧師に広島平和記念公園前まで連れて行っていただきました。長年行ってみたいと思いながら、機会に恵まれず、今回が初めてとなりました。

1995年に横浜港南台教会で、被爆した沼田鈴子さん（1923－2011）をお招きしてお話を聞いたことがありました。彼女は22歳の時、原爆により左足を失い、さらに婚約者が戦死され、悲しみ、不幸のどん底を生きられました。けれども被爆したアオギリが新芽を吹いているのを見た時、励まされ、**原爆の惨事の中で「生かされた者」として、被爆体験を後世の人々に伝える使命に目覚め、原爆での犠牲者たちにかわり、原爆の恐ろしさと愚かさを世界中に伝えることを決意**され、不自由な体を押して、広島だけでなく、日本中、世界中を歩かれました。私どもの教会に泊まって下さった時、足膝をつけて3階の牧師館に登られました。申し訳ない気持ちで一杯でしたが、その時、「だいじょうぶです。こうするのが一番楽なんです」と言われ、私たちの心配を気遣って下さいました。キリの本を見るたびに沼田鈴子さんの毅然としたお顔と生涯を思います。



熱線と爆風で命を奪い、放射能で体内深く細胞を傷つけ、長い苦しみを与えている、原子爆弾がいまだに保持され、研究開発されているとは恐ろしい限りです。資料館の中で遺品や写真を見た時、あまりにもむごたらしくて、言葉になりませんでした。また、破壊された広島市内の模型パノラマを見た時、原爆の凄まじさをリアルに感じました。頭上600mに、温度1,000,000° Cの、直径280mの熱の塊となった原子爆弾が、赤い球の形になってぶら下がっています。そこから出る熱線は、一瞬で焼き尽くすに違いないと思いました。多くの小中学生の団体、外国人の若い人々、家族連れも熱心に見学していました。公園には様々な記念モニュメントがありました。資料館の展示や原爆ドームはやはり負の遺産として、アメリカ人も直視すべきものでしょう。

夕方再び盛谷牧師と合流し、食事をしました。牧師は懐かしそうに私の妹の大学時代の呼び名を連発し、「レーコちゃんに、沖縄であってネ」などと、私に妹と似ているところを探そうとニヤニヤ眺められました。それで私もすっかり今日初めて会った方とは思えないほど、親しみを感じてしまいました。奥様の被爆と闘病のお話を聞きました。原爆の放射能がこんなに深く体を蝕み、幸せな愛の日常を壊し続けていることが悔しく、残念で仕方ありません。

夕食後に牧師のお得意のノドをご披露してもらうことになりました。「牧師になってすぐ、教会員だったパイオニア社の社長からステレオをプレゼントされた、レコードがなかったところ、友人が一枚フランク永井のLPをくれた、毎日毎日それを聞いているうちに、全曲歌えるようになった」と告白されたからです。カラオケに何年ぶりかで出かけました。♪そばにいてくれるだけでいい。黙っていれば、**な**おいしいんだよォ♪ などと私は茶々を入れましたが、にこにこ笑いながら「おまえに」を歌ってくれました。フランク永井のようなソフトな低音で、しかも、とても上手でした。♪赤い灯 青い灯 ともる街角に あの娘を捨てて 俺はゆく

さようなら さようなら 俺は淋しいんだ あの娘と別れて ひとり旅へゆく♪
フランク永井の歌を何曲も歌ってくれました。愛する人に先立たれた、辛い淋しい気持ちが心に沁みました。奥様の先生への愛と感謝が思い起こされ、お二人は永遠の命の中で共に生きておられる、と感じます。歌は、フレーズのどこかに自分の気持ちを投影できて、良いものですね。